

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 堀口 真利子

論 文 題 目

村上春樹・江國香織小説研究——親密性をめぐって

論文審査担当者

主査 名古屋大学 准教授 日比嘉高

委員 名古屋大学 教授 飯田祐子

委員 名古屋大学 教授 中村靖子

委員 静岡大学 教授 酒井英行

委員 国際日本文化研究センター
教授 坪井秀人

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、村上春樹および江國香織の作品を、「親密性」と「暴力」の表現の観点から分析したものである。論文は、序章と終章を除き2部9章によって構成されている。

第I部では、村上春樹の恋愛小説にみる「親密性」を論じている。第1章の『ノルウェイの森』論では、主たる女性登場人物・緑が男性的規範からの解放を目指すものの、その企図は主人公・僕との親密性が形成されたときから弱体化していると論じ、女性の主体性が男性と作りあげた親密性の中でゆらぐことを指摘した。第2章は「飛行機——あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」を分析する。新たな親密性の中で母娘関係を再演することにより、かつて母親から受けた心の傷をいやそうとする女の物語として作品を読解し、女性主人公が男性主人公をコントロールしようとするプロセスの中で、相互の主体が再構築されていくさまを分析した。第3章『1Q84』論では、女同士の連帯および女性同性愛関係がどのように表現され展開したのかを分析し、男が行使する暴力に対抗する女の暴力が、女同士の親密な連帯の中から生じていることを明らかにした。第4章『東京奇譚集』論では、短篇「品川猿」を取り上げ、1990年代の日本社会の問題を象徴化する「地下世界」に注目しながら、個人の生が細分化されてしまう状況の中で、親密性が果たす役割と限界とを論じた。

第II部では、江國香織の諸作品を取り上げ、恋愛・家族・セクシュアリティが複層的に絡み合うありさまを論じた。第5章『流しのしたの骨』論では、家族という親密性の中に生じる男性支配構造の暴力性を検討し、女たちがそれに対抗するために築き上げる連帯を論じた。第6章『思いわずらうことなく愉しく生きよ』論では、父親・夫の暴力に注目し、家庭の暴力が世代を超えて連鎖してしまうありさまを論じた。第7章『落下する夕方』論では、互いが関係し合うことで生じる「痛み」と、関係することで消される「痛み」との反復が個人を孤独へ向かわせ、女性の親密な連帯を崩壊させていると論じた。第8章『きらきらひかる』論では、ジェンダー規範の面からすれば周縁的な位置に置かれた者たちの葛藤と、彼らの形成する親密な関係に注目した。一見、規範的な関係に対抗的であるようにみえる作品が、実は異性愛中心的であると指摘した。第9章「おそ夏のゆうぐれ」論では、恋人の皮膚を食べるという行為が、主人公の女性の能動性と受動性がない交ぜになったセクシュアリティの極地にあると論じた上で、結末部における女性の能動性の快復と、男性の抑圧の消去とが描かれているとした。

終章では、村上、江國両者の文学における親密性の特徴を比較しながら考察した。いずれの作品も「痛み」を通して親密性の不可能性を描く点において共通性を持つが、村上文学は、恋愛や性愛の不可能性を際立たせる悲劇を描き、江國文学は、柔軟に応答して親密性の持続へと物語を進める傾向にあるとした。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

村上春樹の文学については、その世界的な人気と知名度に後押しされる形で、数多くの研究が積み上げられて来ている。本研究はそうした厚い先行研究の蓄積を引き受けながら、表現の細部を読み込むことで新たな作品解釈を行って見せた。江國香織についての先行研究はさほど多くはないが、本研究は重要な知見を適切に参照しながら、やはり作品の表現に即した考察を展開し、作品のさらなる理解に寄与している。

本論文を構成する本論部分の9章すべてが村上、江國の長短編を対象とした作品論として書かれているが、全体を貫く鍵としているのが、作品に描かれた親密性と暴力への注目である。この着眼点は、他者との関係性に困難を抱えた個人を描き、その葛藤や回復、諦念などを描いてきた両者の文学を分析するに際し、適切だったと評価できよう。親密性はマージナルな状況に置かれた個人や集団が、互いを支え、時には抵抗していく際の拠りどころとなる、心理上の、また人間関係上の紐帯である。本論文はそうした親密性が、村上春樹と江國香織の文学を読み解いていく際の一つの焦点となりうることを説得的に提示した。

さらにこの親密性が暴力と裏腹の関係にあることを論じた点も本論文の達成であると言えよう。親密な関係は、人の支えとなることもあれば時に身近な人を縛り付け抑圧する桎梏ともなる。本論文は、村上・江國両作品のなかにさまざまな形で表象される暴力に注目し、それが時に家庭内で女性たちを抑圧し、時に主人公を窮境に陥れ、時に女性たちの連帯の力となりうることを指摘した。登場人物たちのふるう／ふるわれる暴力が、その暴力の影響圏に巻き込まれる人々の関係性を組み替え、親密な連帯を作りだしたり、崩壊させたりする道筋を明らかにしたわけである。

親密性と暴力への注目は、各章によって濃淡があるが、村上春樹論の中では『1Q84』を論じた第3章、江國香織論の中では『流しのしたの骨』を論じた第5章が、もっとも明確にその論旨を展開しえた章であり、説得力も有していたと評価できる。

一方、いくつかの問題点がないわけではない。親密性および暴力という本論文における鍵概念の規定があいまいであったことは指摘せざるをえない。親密性についてはアンソニー・ギデنزらの先行研究を参照し、前提とすべき理論的枠組みを明示していたにもかかわらず、各章における考察でその用法に揺れがみられた。暴力についても同様に、さまざまなバリエーションをもって展開されている作中の暴力を、包括的に「暴力」とだけ呼んでしまったために、読解の深度と多様性を制限されたものとしてしまっている。また作品論として個々の論考に価値が認められる一方、博士論文総体として追求されるテーマがやや小ぶりになってしまったということもある。ただこれらは博士論文としての本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。